全員覚悟ガンギマリな エロゲーの邪教徒モブに 転生してしまった件

著：へぶん99
イラスト：生煮え

GCN文庫

無断転載禁止

一章　一般人in邪教

生物の気配がしない月明かりの夜。フード付きの外套を羽織った黒ずくめの集団が、引き絞ったクロスボウを構えながら森の中を歩いていた。

集団の一人であった俺は、四方の闇に神経をすり減らしながら歩みを進める。

俺達は森の中に逃げ込んだ敵を追って編制された小隊だ。その数、十人。いずれも訓練された『アーロス寺院教団』教徒である。

数時間前、俺達は教団の幹部にとある任務を任せられた。森に逃げ込んだ女を殺してこい、という任務である。

教団に近づいた不届き者がいたのだろう。そういう輩を排除する任務が下りてくるのはよくあることだった。

「っ！」

前方で斥候を務めていた男――確かロイドという名前――が「止まれ」の合図を出す。

ハンドサイン曰く、敵を見つけたらしい。斥候の後方についていた俺達は即座に腰を折り、周辺環境の警戒に当たる。

斥候のロイドの手が示す先へ目を凝らしてみると、茂みの向こう側に崩れかかった廃屋が見えた。直後、廃屋の中で蹲る目標の女を目視。俺達は幹部から彼女の首を要求されている。思わずクロスボウを握る手に力が入るのを感じた。

全員が敵の姿を認識すると、ロイドは人差し指をくるくると回す。「取り囲め」の合図だ。俺達は頷き合った後、足音と呼吸音を立てずにゆっくりと廃屋を取り囲み始める。

完全に包囲された敵。彼女は俺達の接近に気づいていないのか、腹部の治療に夢中だった。露出した肌に刻まれた生傷は寺院教団の者と戦った際にできた傷だろう。

ただ、彼女の治癒行為を黙って見ているわけにもいかない。このまま放置すれば女を取り逃がす可能性が生まれてしまうからだ。

ロイドの決断は早かった。彼はクロスボウ発射の合図を出した。

それと同時、俺達十人は一斉に矢を放つ。鏃に猛毒の付着した矢だ。直撃すればもちろん、掠るだけでも絶命は免れない。加えて、常人ならば反応することすらできない強化クロスボウから放たれた矢だ。それが四方八方から十本分。絶対に避け切れない。

（確実に殺った。相手が原作キャラじゃなければの話だが――）

そんな思考が脳裏を掠めた直後、たんたん、と木を貫く乾いた音が響き渡った。

無断転載禁止

「なっ――」

誰かが抜けた声を上げる。俺達が注目する中、十本の矢全てが女を避けるように不自然な軌道を描いたのだ。

――矢避けの加護。

そんな言葉が脳裏を過ぎって、俺は全てを察した。

（間違いない、アレは原作キャラが使う魔法の一種だ！）

風の魔法使いに対して弾や矢の類は無意味だ。俺は女の正体を悟って剣を抜く。

しかし、彼女を只人と考えていた他の者は、有り得ない状況を前にして一瞬の思考停止状態に陥ってしまっていた。

そんな隙を敵の女が見逃すはずもなく――まず、ロイドの首が飛んだ。一人、また一人と頸部を薙ぎ払われていき、時計回りの順番に兵士の首が宙を舞う。瞬く間に四人、いや五人が絶命した。

（クソクソクソ!!　何でこんな時にネームドがっ!?）

血飛沫の雨の中で躍る銀髪の女。その姿を見間違えるはずがない。

彼女は風の魔法使い――セレスティア・ホットハウンド。俺の所属する組織『アーロス寺院教団』と敵対する『ケネス正教』幹部序列七位のシスターであった。

セレスティアは原作で所謂『弱キャラ』に位置する人間だが、それはあくまで英傑や怪物の

蔓延(はびこ)る原作世界での話。俺達のような力なきモブは逆立ちしたって敵うはずがなかった。
セレスティアは右手にナイフを構えながら、風の魔法を利用して木々の隙間を縦横無尽に飛び回る。常人には不可能な移動動作は生き残った教徒に動揺を与え、敵対相手が只人ならざる者なのではという予感をもたらした。
精神的優位が崩壊し、狩る側から狩られる側に回った俺達の瓦解は早かった。
「ぐあああっ!?」
「うがっ！」
あっという間に連係が機能しなくなり、周囲の教徒は悲鳴を上げながら肉塊へと変えられていく。
（ウソだろ、こんなに人数差があるのに――）
厳しく訓練されたからこそ分かるが、俺達兵士は一般人が相手なら確実に負けないだろうという自負がある。
だが、敵は一般人に非ず。セレスティア・ホットハウンドという魔法使いは俺達にとって災害同然の不可逆な存在であり、頭のおかしい化け物でしかない。奴らの扱う理不尽な力の前には無力なのだ。残った教徒達も次々に討ち取られていく。
隙を見て逃げることすら許されない。逃げられないのなら、戦うしかない。たとえ死ぬと分かっていても。

無断転載禁止

「おっ、オクリー！　どうすりゃこいつに――」
数少ない顔見知りの兵士が涙を流しながら振り返ってくる。
「お話ししている暇はありませんよ？」
「あっ」
柔和な女の声が飛ぶと同時、目の前を不可視の衝撃波が過(よぎ)った。
風の刃、鎌鼬(かまいたち)。その風圧で視界が奪われる。背景の輪郭が歪む。程なくして瞼を開くと、そこには上半身と下半身に分断された兵士の姿があった。
「お……くりぃ……」
涙面の男は俺の足にしがみつくと、血走った目をかっと見開いたまま事切れた。何をされたのかすら分からないまま。
俺には分かる。風の魔法で攻撃されたのだ。ただ、それが判明したところで対処法がない。俺は魔法も異能も使えないモブだから。
（どっ――どうするんだよ!?　勝てるわけがない!!　でも……ここから逃げられるわけでもないし……!!）
雑魚だから勝てないのか、勝てないから雑魚なのか。最後の一人になって追い詰められた俺は、がたがたと震えながら剣を構えた。
その情けない様子を見て溜め息を吐くセレスティア。彼女は呆れたように蔑んだ視線を向け

てくる。

「十名の雑兵でわたくしを仕留められるとお思いで？　それともわたくしの正体を掴めていなかったのですか？」

――あぁ、原作と同じ声だ。透き通るような美しい声。

歯をかちかちと鳴らしながら、俺は涙ながらに笑った。

銀の髪。紫の瞳。素肌を隠す修道服。ゆるふわな女性かと思いきや案外戦闘狂で危なっかしいところがあって、優しさの奥底に揺るがぬ芯があって。

原作であれば頼れる上に可愛いシスターだったのに――敵に回すとこんなにも恐ろしい。

「では、さようなら。哀れな邪教徒さん」

セレスティアはこちらに手のひらを向けてくる。最悪だ。終わった。無駄な足掻きすらできない。貧相な剣を構えたまま、その覚悟すら出来ないで俺の人生は終わるのだ。

腰が抜けそうになって、数歩後退する。そして、倒れそうになった目の前の風景が歪む――その直前。遥か後方から超高速で飛来する物体があった。

「っ!?」

セレスティアが攻撃の気配を察して息を呑む。矢避けの加護を受けているはずの彼女は、飛来物体に対して大きく回避行動を取った。直後、セレスティアが元いた場所は謎の物体の直撃を受けて爆散していた。

無断転載禁止

着弾点の程近くにいた俺は衝撃と爆風によって吹き飛ばされ、後方の木の幹に背中から叩きつけられた。

「がっ……は！」

赤熱した違和感が全身に走る。少し遅れて脳天をかき鳴らすような耳鳴りが起こり、俺は熱を伴った衝撃に打ちひしがれた。

血を吐きながら地面でもがいた後、俺は新たなる化け物の襲来を察した。

あぁ、アイツが来た。最悪だ。『アーロス寺院教団』幹部序列六位、ヨアンヌ・サガミクス――教団きっての狂人が駆けつけてしまったのだ。

飛来した物体の正体は――ヨアンヌの生首。

遥か彼方から降ってきた衝撃でヒトの頭部と分からぬほど歪み損傷した頭蓋だったが、辛うじて眼窩（がんか）に留まった眼球が強い意志を帯びると同時――たちまち外傷や欠損が解消され、顎の下からうねる脊椎が生えてきた。

脊椎が尾の如く直下へと伸びていき、身体の中心部に脈打つ血管や組織が形成され、成長し、敷き詰められていく。四肢へと至る骨格が整い始め、遂に真っ白な皮膚が肉の表面にコーティングされる。

生首から全身を再生させた少女は、生まれたままの姿でけたけたと笑っていた。

ヨアンヌの生首が飛んできてから、僅か数秒の出来事だった。

「そこのオマエ、マーカーの役割サンキューな」
治癒魔法。それは、アーロス寺院教団及びケネス正教の幹部が持つ奇跡の力である。ヨアンヌはその力を用いて遠方からやってきたのだ。
「くっ……ごほっ！　め、滅相もないです……」
俺は血痰を吐きながらヨアンヌに返事する。彼女の機嫌を損ねた瞬間、俺はハエを潰すかの如く無感動に殺されるだろう。返事をしなかった場合でも、それはそれで機嫌を損ねるのでお終いである。
突然現れたヨアンヌに対して下手なことを言えば死ぬし、この場から逃げても死ぬ。セレスティアと戦っても死ぬ。俺は一体どうすれば良いのか。
情けなく泣き出してしまいそうになりながら、息を殺して幹部同士のいがみ合いを見守る。
二人は一定距離を保ちながら睨み合い始めた。
「……ヨアンヌ・サガミクス。穢らわしい邪教徒の犬が」
「あぁ……教祖様の素晴らしさが分からない哀れな蛆虫セレスティア。久しぶりだな」
「貴女、以前より吠えるようになりましたね？」
お互いへの黒い感情が垣間見える罵倒の後、沈黙。セレスティアのつま先に力が入ると同時、それに反応したヨアンヌが跳躍する。化け物同士の戦いが始まった。
――この世界では、治癒魔法が使えなければ話にならない。

無断転載禁止

苛烈な戦いの中で身体が千切れるのは当たり前。当然、身体の大部分が吹っ飛ぶことも計算に入れて戦わなければならないのだ。
欠損部位は即座に回復できない方が悪い。全身を木っ端微塵にされたくらいで死ぬ方が悪い。そういうレベルの戦いが巻き起こっていた。
血潮が飛び散り、どちらのモノとも分からぬ肉塊が舞い踊る。ヨアンヌに至ってはわざと首を切り離して肉体を飛び地から再生させた後、セレスティアに向かって死角からの奇襲を仕掛けているほど。
（何なんだこいつらは……！　意志の力がぶっ飛びすぎてるというか、覚悟がガンギマリすぎるだろ……！）
ヨアンヌの強靭な膂力から放たれる弾丸のようなパンチで、奇襲を防御し切れなかったセレスティアの右腕が吹き飛ぶ。
だが、セレスティアは動揺しない。彼女は根本から断たれた右腕を風の魔法で操り、瞬時に別角度からの魔法射撃を試みていた。
あまりにも目まぐるしすぎる攻防に置いて行かれっぱなしだ。俺みたいな一般人は、次の展開の予想すらできない。
宙に留まったセレスティアの右腕から風の塊をぶつけられ、背中からの射撃を受けたヨアンヌは全身を粉微塵に切り刻まれた。肉体の全てをサイコロ程の大きさに切断され、彼女の姿は

見る影もない。

もちろん粉々になった程度では死なないので、ヨアンヌは肉片が飛散し切らないうちに完全復活して肉弾戦を仕掛けていたのだが――

ヨアンヌの特性は、治癒魔法を持つ者の中でも最上級クラスの効力を有する自己再生能力である。

セレスティアのような個性ある風の魔法は一切使えないが、その代わりに肉体の回復速度が異常に速い。どれだけ殺そうとも即時復活してくるので、セレスティアにしてみればヨアンヌとの戦闘はキリがない。

セレスティアに同情する気はないが、ヨアンヌの不死身っぷりは度を越えていた。

「威勢が足りないんじゃないの、セレスティアァ!?」

しかし、ヨアンヌが怪物ならセレスティアもまた怪物。どれだけ身体を吹き飛ばされようと、セレスティアにも身体を復活させられる治癒魔法がある。ケネス正教のシスターは類稀な精神力を以て、ヨアンヌに的確な反撃を食らわせていた。

二人共、本当に同じヒトという種族なのだろうか。殺伐とした戦いの傍観者となっていた俺はふと思う。このままじゃ戦いに巻き込まれて死ぬのがオチだ。

早く何とかしないと、夜が終わるまで決着がつかないかもしれない。時間が経過すればするほど巻き添えを食らって死亡する確率が上がっていくだろう。

無断転載禁止

（俺の武器は……毒矢つきのクロスボウと鉄の剣だけ……）

装備を確かめて絶望する。

無理だ。魔法の力を持たない俺が介入できる場面じゃない。せめてあの二人の肉体を吹き飛ばせるような爆薬がないと。

俺は直接の戦闘参加を諦め、他の情報に目を向ける。

戦闘が実質的な膠着状態なのは、セレスティアにとってあまり喜ばしい事態ではないはずだ。彼女はアーロス寺院教団から逃亡中なのだから、内心さっさと退却したいはず。

両者共に決定機を掴めていないこの現状、俺達が活かせることと言ったら二対一の人数差くらいしかない。俺がセレスティアにちょっかいをかけてヨアンヌを援護し、人数有利を示せたなら、セレスティアは俺を厄介に思って退却してくれるかもしれない。

考えている暇は無かった。俺は毒矢を仕込んだクロスボウを構え、高速移動しながら戦うセレスティアに向けて矢を射出した。

矢が二人の中間を掠める。

「っ！」

「オマエ……」

二人は驚いたようにこちらを見た。次なる毒矢を放つと、セレスティアの防護壁によって呆気なく軌道を逸らされる。

だが、これでいい。俺に交戦の意思があることを二人に示せたのだから。
「ヨアンヌ様、爆弾で援護します！」
腰のポーチを探るフリをして牽制する。もちろん嘘だ。空を飛び回るセレスティアに手投げの爆弾が効くとは思えないが、俺という存在が厄介に映ってくれれば問題ない。
爆弾持ちの邪教徒と邪教幹部を同時に相手にするのは危険と判断したのか、銀の髪を靡かせたセレスティアが後退しながら呟いた。
「なるほど、厄介ですね」
抵抗の意思を見せた俺が鬱陶しかったのか、それとも埒が明かないと考えたのか、セレスティアは隙を突いて目くらましを使った。
大量の落ち葉が巻き上がり、セレスティアの姿が掻き消える。
枯れ葉を巻き込んだ旋風が消え去ると、セレスティアの姿はどこにもなかった。風で森が揺れる音だけが残っていた。
「はぁぁ……逃げやがった。今度こそ殺せると思ったのに」
ヨアンヌは裸のまま唾を吐き捨てる。しばらく空を見上げていたかと思うと、彼女の緑の瞳がこちらを睨んだ。
「おいオマエ。ただのマーカー役にしてはえらく肝が据わってるじゃないか」
「あ、ありがとうございます……」

無断転載禁止

「傷見せてみろ。あ～まぁこれは軽傷だな」
裸足でぺたぺたと近づいてくるヨアンヌ。言われるまま身体の傷を見せると、彼女は俺に治癒魔法をかけてくれた。普通に重傷なんだが……という感覚の違いは置いといて、それよりも驚いたことがある。
（お、おい……ウソだろ。こいつこんなキャラだったか？　使い捨ての部下なんてどうでもいい、みたいな性格だったはずなのに……俺を労ってくれてる？）
俺の目の前で、メッシュの入った青のウルフカットが揺れている。ヨアンヌは何も喋らなければ普通の少女に見えるが――そりゃ当たり前だけど――その正体は正真正銘のサイコパスだ。
部下を普通に使い捨てるし、教祖以外はどうでもいいという徹底っぷりを原作中にて遺憾無く発揮していた。そんな彼女に気遣われて、俺は妙な動揺に襲われているわけだ。
（というか、俺の怪我を気にしてくれるのに、自分が裸なのは気にしてないのか……）
裸のヨアンヌに治癒されている俺は視線のやり場に困ってしまう。流石に全裸のままにさせておくのは嫌だったので、羽織っていた黒い外套をそっと肩に掛けてやった。これで目のやり場に困らなくて済む。
ローブを掛けられた彼女は、驚いたように螺旋状の瞳を見開いた。治癒の手を止めて俺の顔を覗き込むと、蛇のように枝分かれした舌で己の唇を舐めるのだった。
「オマエ気が利くな。名前は何て言うんだ？」

漫画喵森林

何故か名前を聞かれてしまった。
答えないわけにもいかないが、凄まじい拒絶感が伴った。
「……オクリー・マーキュリーです」
「その名前、覚えたぜ」
しかも名前覚えられたんだが。最悪だ。
まさか、気に入られた……とかじゃないよな？
「おいオクリー、一旦帰るぞ。ここに居ても何もないだろ」
「は、はい……最後にひとついいですか？」
「あ？」
「その、死んだ奴らを埋葬してやりたくて」
「そうか。好きにしろ」
ヨアンヌは吐き捨てると、近くにあった岩に座り込んだ。
俺は彼女の監視の下、ボロ雑巾のように使い捨てられた九人の亡骸を土に還した。
何かが違っていれば、俺もこうなるはずだった。
せめてもの弔いとして埋葬だけはしてやりたかった。
「オマエ、変な奴だな」
原作屈指の狂人であるヨアンヌに言われて、お前にだけは言われたくないという言葉を何と

無断転載禁止

か呑み込む。
かくして、正教徒と邪教徒の激突は一応終わりを告げた。
――この出来事をきっかけに、俺の運命は大きく変わっていくことになる。

二章　名無しモブが幹部会にぶち込まれるとか公開処刑でしかないよね

二〇〇〇年代後期、前世の俺が生きていた頃の日本で『幽明の求道者』というＰＣアダルトゲームが発売された。発売直後は特に話題にもならなかった本作だが、口コミやネット掲示板で徐々に評価を伸ばしていき、一躍人気作へと成り上がった。

まず、本作品は『ケネス正教（正教側）』と『アーロス寺院教団（邪教側）』の戦いを描いた西洋風ダークファンタジーである。

大まかなストーリーの流れとしては、『アーロス寺院教団』の襲撃によって故郷を滅ぼされた主人公が『ケネス正教』に助けられ、それから正教側となった主人公が邪教徒を滅ぼすべく戦いに身を投じていく……というもの。

家族や友人を皆殺しにされた主人公の精神力は凄まじく、正史ルートでは邪教幹部のほとんどを討ち取って完全勝利している。

ここで強調しておきたいのは、主人公には優れた血統などの設定は存在せず、また故郷の秘密のような特別性がなかったこと。つまり、彼はあの幹部連中を相手に地力で戦ったのである。

そんな主人公もほとんどのルートの後半ではケネス正教幹部になっており、魔法の力に目覚

めるという覚醒イベントが起こるわけなのだが……そこを掘り下げると長いので割愛する。

さて、『幽明の求道者』の舞台設定や世界観自体は、珍しくも何ともない使い古されたものだ。そんな本作が何故売れたのかと言うと、ゲーム自体の完成度の高さもあったが、何より登場人物が全員覚悟ガンギマリすぎる傑物だらけだったからである。

主人公はもちろん、ヒロイン、友人ポジのキャラ、師匠、上司、敵――名前のついたキャラは己の命を差し出すことに葛藤こそあれど躊躇（ためら）いが無い。躊躇（ちゅうちょ）が無さすぎて購入者の度肝を抜いたのだ。

己の死に納得できる理由――即ち『宗教戦争に勝利する』ことに繋がるなら自分一人の命など安いもの、そんな思考回路で動いている。

というわけで、本作品の特徴はエログロ鬱と正史ルートの『燃え』要素だ。俺がこのゲームを購入したのは二〇一〇年代に入ってからだが、その完成度に圧倒されたのを覚えている。

古臭さを感じさせないイラストやグラフィック、登場人物の苛烈なまでの生き様。戦闘の迫力と自由度、個別ルートにおける日常の甘々具合は最高だ。

俺が最も気に入っていたのは、ヒロイン達に用意された個別ルートである。個別ルートの何が良いって、激情家の武人かと思われていたヒロイン達の内面が明らかになることだ。主人公と恋をする場面を追体験することで、俺達は画面の前で「あぁ、彼女達も女の子だったんだな～」とニチャつけるわけである。

無断転載禁止

――まぁ、こうして個別ルートでヒロインと親睦を深められる程度ならただの美少女ゲームだっただろう。

『幽明の求道者』の凄まじいポイントとして、個別ルートでも選択肢によってはヒロインが植物状態になったり無残な死に様を迎えたり……それはもう極限までリョナ要素を突っ込んでくることが挙げられる。日常パートが終わった後の一〇クリックの間に味方拠点が壊滅、なんてルートもあるくらいだ。

このゲームは人の命が軽すぎる。しかも、大抵死亡に至るまでの描写がえげつない。死に際に関しても、九割がた原形を留めないか骨すら残らない場合が多すぎる。プレイヤーの心を折りに来ているのは、やはり死に至るまでの過程なのだが……。

ネームドキャラが全員『肉片からでも蘇生が可能なレベルの自己治癒魔法』を標準装備している性質上、そうした描写が強烈になりやすいのも過激さの原因の一端だろう。

敵がどんな傷でも回復してくるなら細胞を一片残らず消し去るしかないじゃん、みたいなゴリ押しが正規の攻略方法なのだからヤバすぎる。

そんなわけで、『幽明の求道者』は設定からして過激なゲームであり――

――最悪なことに、俺はそのゲームそっくりの世界に転生してしまったらしい。

先刻、俺は幹部同士のゴリ押しによる殺し合いを目撃した。セレスティアがヨアンヌの肉体

無断転載禁止

を粉微塵に切り裂いたにもかかわらず、ヨアンヌは治癒魔法によって肉片から即時復活していたし、逆も然りといった感じである。

（普通に頭がおかしすぎるだろ……）

実際に目の当たりにするまで実感できてなかったが、改めて分かった。この世界は俺が生き抜けるような温い世界じゃない。

原作のネームドキャラ曰く、身体を吹っ飛ばしたり吹っ飛ばされたりする常軌を逸した行為は「ちゃんと衝撃が来るから覚悟が必要」らしい。包丁で手先を切った時ですら『衝撃』が来るのに、死と同等の衝撃を受けても動揺しないネームド連中はイカれている。

現在、俺は邪教側の人間であることを激しく後悔していた。同じ化け物同士の徒党に取り入るなら、せめて人間の言葉が通じやすい正教側につきたかった。

この世界で二度目の生を受けたは良いものの、よりによって邪教徒……『アーロス寺院教団』の名無しモブになっちゃうんだもんなぁ。本当に人生は何が起こるか分からない。

（さっきガッツリ体験したけど、アーロス寺院教団はとにかく人使いが荒い。というか名無しモブの消耗がケネス正教に比べて明らかに激しい。同じモブでもケネス正教のモブになれた方が百万倍マシだったな……）

セレスティアと戦ってしばらく。山奥にある教団所有の古城拠点にて、俺は床に膝をつきながら教祖の到着を待っていた。